

現代文学における「姨捨」の系譜（七）

— 柳田 国男「親棄山」 —

工 藤 茂

『定本柳田国男集』第二十一巻に収められている「親棄山」という文章は、戦争中に書かれたものでその初出は昭和二十年二月、三月の『少女の友』（三八巻二号、三号）であった。当時の日本は次第に空襲が激しさを増し、月を追って本が街から姿を消していった。本ばかりではない。食糧事情も悪化して、みんなが飢餓状態に陥っていた。そして、八月十五日の敗戦。その日を契機にして、日本が大きく変っていく年でもあった。そのような時に、時代を先取りしたような「親棄山」という文章が発表されたのは、たいそう興味深いことである。もっとも、その中で柳田国男が「親棄山」とはけしからぬ話、聴くも耳の穢れと思う人もあろうが、是はそういう驚くような話題を出して、先ず聴く者の注意を引き寄せようとする手だてであった、実際

は人に孝行を勤める話なのである。』（『母の手毬歌』と述べているように、古来この話は親不孝の話ではなく、むしろ、親孝行の話なのであるが、それゆえにかえって、戦後の人情を風刺するかのような題名となっていたのである。さて、「親棄山」は雑誌に発表された後、単行本『村と学童』（朝日新聞社）、『母の手毬歌』（芝書店）に、他の文章「母の手毬歌」「マハツブの話」「三角は飛ぶ」「三度の食事」「棒の歴史」「千駄焚き」などと共に収録された。前者の「はしがき」によると、これは、疎開学童の書物が足りないというので出版されたものだったらしい。筆者は、その対象となる読者を当時の小学校五・六年生に設定し、この年代の者が「へめいめいの白力をもって、初めて知る言葉の意味と真価とを、覚え込もうとせずには居られない」年代だと考え、そういった学童たちに疎開のために始めて入った土地で「急にいきいきとしてきた注意力と知識欲と

を、出来るだけ一生のためになる方向へ働かずやうに、当人たちにも考へ付かせること」を意図してこれらの文章をまとめた、と述べている。当時このような発想をするのは、ある面ではずいぶん精神的なゆとりのある人ではなかったかと思う。なぜならば、先にも述べたように、当時は戦争のことと、食糧のことで頭がいっぱいだったのだから。しかも、私たちは何よりも先に、祖国のために自己の命を求められ、そのくせ、飯も碌に食わせられなかったのだから。にもかかわらず、そのようなことはおくびにも出さず、以上のような意図によってこの書物を出版したところに、この筆者の先見性があつたと考えられる。同時にこの本はまた、疎開した学童に為になる話をして聞かせたいと思つているその土地の人々、つまり、大人をも対象にして編まれた本であつた。その理由を筆者は、へ今まで何処でもこの通りと考へて居たことが、めつたによそでは出逢はぬことだったり、又はその反対に爰ばかりと思ふことが、遠く離れた多くの土地にもあつて、愈その由来を究めずにはいられぬ問題が、幾つと無くこの本の中に含まれて居るから」と同じ「はしがき」に書いている。そして実は、これこそがこの本の内容の特色を、端的に示していることばだったのである。『村と学童』は以上のようなことから、本来は敗戦前に発刊されるはずであつたが、結局当時の逼迫した事情から、敗戦の月の翌月、昭和二十年九月に刊行された。そして、『母の手毬歌』が刊行されたのは、それからさら

に四年経つた昭和二十四年十二月一日のことであつた。私の手元にあるのは、「学友文庫」1として発刊されたその一冊である。戦後の出版を示すように、表記は現代仮名遣いに直されているが、漢字は旧字体のままである。そこに収められているのは、「千駄焚き」「親棄山」「マハツプの話」「三度の食事」「母の手毬歌」の五つの文章である。『定本柳田国男集』第二十一巻に収録された文章と、『母の手毬歌』に収められたそれとでは、仮名遣いが相違している。おそらく後者の仮名遣いは、「学友文庫」の編集者が著者の了解を得て、現代仮名遣いに直したものであろう。従つて本来ならば、著者の書いた文章通りの仮名遣いで印刷された、前者の文章によつてこの稿を進めるべきであろうが、それでは手元にある『母の手毬歌』の出版された当時の出版界の雰囲気失われてしまふ。そこで、以下この本の本文を対象にして、拙稿を展開していきたいと考える。(ただし、漢字は印刷の都合で当用漢字体に直した。)とところで柳田国男は、この本の「あとがき」に次のように書いています。

ちょうど今から四年前、空の猛火はだんだんに迫つて来て、自分たちの生死も全く不定であつたころ、村に避難をして居る小学生諸君、そういう中でも殊に始めて親の手を離れて、淋しがって居る女の子に読ませたいと思つて、私は斯ういう文章を十ばかり書いて見

た。其中の六つを一冊の本にまとめて、『村と学童』という名で出版して居る。

先に引用した『村と学童』の「はしがき」は、昭和二十一年七月、つまり戦時中に書かれたものであったが、右の文章は、戦後、昭和二十三年十二月に書かれた。しかしそれが出版されたのは、それからさらに一年経ってからであった。柳田は右の文章に続けて、さらに以下のように書いてゐる。

しかしこの本の中に書いてあることは、戦がすんでしまえばもう用はないと、いうような種類のものでは無かった。むしろ折角珍しい土地に来て居るのだから、ただ淋しがったり、うちを恋しがったりして居ないで、出来るだけ周囲の事物に注意を払い、今まで知らずに居た色々の面白い話を、聴いて覚えておくようにしようというのが、これを書いたときからの私の趣意であった。

柳田がねらいとしたのは、以上の文章で分かるように、異なる土地に疎開している児童に、その土地の伝承に注目させることであつた。つまり彼は、民俗学への誘いをこのような形で書いていたのである。そのことを以下に続く「あながき」の文章が、はっきりと示している。

現在は旅行が中々六つかしく、又新しい読み物が多過ぎて、疎開の日のことなどは忘れかけて居るのであるが、皆さんが大きくなり、上の学校に進み、社会の数々の問題に触れて行くたびに、きつとあの当時の印象があざやかに活きかえり、どういうわけかという不審を、今に起さずに居られなくなるであろう。

(略) 私たちはもっと詳しく他処の人の生活を知り、同時に又町と田舎との間に、どうしてこの様な多くのちがいが出来たかを、考えてみようとして居るのである。

柳田の念願どおり、戦後民俗学に携わる人口は増加し、その研究が深められていった。

さてそこで、このようなねらいで出版された『母の手毬歌』に収められた「親葉山」という文章について、以下検討を加えてみたい。

二

「親葉山」は、以下の順序で話が進められていく。

- 一 有名な昔話
- 二 四通りの話し方
- 三 老人の知恵
- 四 七曲の玉の緒その他

五 外国で作った昔話

六 接穂と台木

七 日本で出来た昔話

八 昔話と和歌

九 母の愛情

この文章の第一の特色は、親棄山の昔話を以下のように四通りに分類した、その分類の仕方にある。

第一種の話というのは、或る男が六十になった親をもっか 奮とかあむか 奮とかに入れて、小さい息子に片棒をかつがせて、山の奥へ棄てて行く。やがてもっか 奮も棒もそこにおいて帰って来ようとする、その孫が父に向って、是は家へ持って還りましょう。今に又いることが有るからと謂った。それを聴いて男はああそうだと心づき、親を棄てることを止めて又つれ戻ったといふので、この話はよほど古い頃から、支那で有名な話だったといふことで、色々の本にも絵にも彫刻にもなつて居る。

柳田国男は四種の話のうち、右に引用した話をその最初に紹介する。その意図は外来種の昔話を最初に紹介し、在来種のそれを最後に持つていこうとするところにある。そのほうが日本にも古くからこの話があつて、そこに外国から入ってきた話が接ぎ木されて現在のような昔話ができ上がった、ということ述べていくこの文章の展開に都合が

いいからであろう。事実、関敬吾の『日本昔話大成9』を見ると、この話は「五二三C 親棄奮」として「親棄山」の昔話の三番目に位置づけられているが、そこに分類整理されている昔話には、柳田がこれから述べようとしているあと三つの話（難題型、鬭争型、枝折型の話）が混在している。

さて、この話を分類の最初に持つてくる方法は注（一）に引用した『日本お伽集1』の分類と同じで、そこに「第一 原谷の物語」とあるのがそれである。同書ではこれを印度起源の伝説としているが、柳田国男は右の引用でも分かるように、中国起源としている。文献を見る限りでは後者の起源説が適切だと思わざるを得ない。『今昔物語集』に〈震旦厚谷〉、『私聚百因縁集』に〈楚人孝孫原谷〉、『沙石集』に〈漢朝三元啓ト云者〉とあるのだから。しかし、関敬吾の『日本の昔話』（昭52・日本放送出版協会）によると、この親棄奮の昔話は奮をカーペットに代えて實際目録タイプに入っているというから、世界に広く分布していたのであろう。

ところで、「原谷の物語」の〈原谷〉とは、先に引用した柳田の文章に出てくる〈小さい息子〉、すなわち孫の名前のことである。これも文献によって異なっているのは以上のとおり。なお、未見であるが、日本古典文学大系の『今昔物語集』および『沙石集』の頭注によると、原典（出典）の『孝子伝』では〈孝孫原谷〉となつているとい

う。そこで「原谷の物語」として分類したのであろう。同じ頭注によると、米沢本の『沙石集』には「原谷元啓ト云二人ノ子」と記されているとのことであった。

第二種の話し方は、是よりも今すこし込み入って居て興味がある。むかしむかし或国の王が、年寄りはいらぬものだから皆棄ててしまえという命令を出して、それに背いた者は嚴罰を受けることになって居た際に、一人の孝行者がどうしても棄てることが出来ず、親を床の下とか土手の陰とかに匿して置いて、そっと毎日の食物を運んで養って居た。そのうちに敵の国からこちらの人の知恵を試そうと思つて、むつかしい問題を出して来た。是に答えぬと恥でもあり、又賢い人が無いと知つて、攻めて来られるにちがいないので、誰かこの難題を解く者があつたら、望み次第の褒美を下さるといふことになつた。親を匿してゐた孝行な倅が其話を親にすると、そんな事は何でも無い。斯うすればよいのだと簡単に教えてくれた。それを王様のところへ申し出て、賞与の代りには親を棄てなかつた罪を宥して下さいという、王も始めて老人は賢いものだといふことに心づき、かつは息子のやさしい心掛けに感心して、約束の褒美を与えると共に、早速そんなまぢがった命令を取り消したという話……。

この話は他国から出された難題を老人の知恵を借りて解く内容から、難題型と呼ばれている。日本の昔話ではこの型の親棄山の話が最も多いので、『日本昔話大成』では「五三三A 親棄山」としてその分類の最初に位置づけられている。従つてこの昔話は古くから日本で語られていたかのように思われがちであるが、実は（是も我邦へは支那から入つて来たらしいが、元の起りは印度であり、雑宝蔵經という仏法の経文の中に、出て居るといふことまで今日ではもう判つて居る）と柳田が述べているように、外来種の昔話だったのである。『日本お伽集1』では「第二種 通明神の物語」とし、これも印度起源と注記されていた。

難題型のこの話は、文献上では二系列に分離する。その一つは『枕草子』『今昔物語集』の系列。もう一つは蟻通明神の縁起とでもいふべき『貫之集』『俊頼口伝集』の蟻通の歌の項、『神道集』の「蟻通明神事」、『室町時代物語大成』に収められた奈良絵本、および謡曲の「蟻通」の系列。そして、この後者の系列と同じ内容を持った伝説を『日本昔話大成』では「五三三B 蟻通明神」として二番目に分類している。だが、柳田の「親棄山」にはこの項目の分類はなく、へーばん有名なのは七曲の玉の緒、一名を蟻通しという話、是は今から千年も昔、紀貫之よりも前の事とさえ言われて居る」と、第二種の話の中に含めて説明している。

今でもテレビジョンのクイズ番組に人氣が集中するよう

に、親棄山の昔話も難題型のそれが最ももてはやされたようである。その昔話の難題を柳田は七例挙げて説明している。

(1)七曲の玉の緒(法螺貝、榮螺の殻の底の穴などに緒を通す。)

(2)木の本末の判別

(3)親子馬の見分け方

(4)二匹の蛇の雌雄のの区別

(5)象(でっかい牡牛)の重さ

(6)灰繩千束を献上

(7)打たぬ太鼓の鳴る太鼓

右のうち(6)と(7)を筆者は「是だけは日本で昔話をする人たちが、思い付いた趣向だったように思われる」と述べている。なお(1)と(5)の括弧の中は日本に渡来してからの難題の日本化を示す。

ところで閑敬吾は、『日本の昔話』においてこれらと同一モチーフを持つ話が、古くバビロニアの「ハイカル昔話」やインドにあったことを指摘した後、『今昔物語集』の「遺老伝説」の出典は『雑宝蔵経』巻第一としてある。

棄てられるのは父ではなく母となっている。課題は、牝馬の親子、木の本末の判定、象の重さの三つである。『インドの説話』にあげられた説話で『今昔物語集』と異なるものは毒蛇の雌雄、覚者と睡者の区別、ひとすくいの水が大海より多いという理由などがある」と述べている。

『今昔物語集』巻第五天竺付仏前の「七十余人流遺他国語第卅二」の出典は、日本古典文学大系の頭注によると『雑宝蔵経』第一(4)棄老国縁(法苑珠林卷第四十九、不孝篇第五十、棄父部第四にも引く)。ただし、本集の「母」を原典「父」に作るほか、難題はすべて天神が試すことになっている。また、原典には、二蛇の雌雄を知ること、睡者と覚者との別、一掬の水が大海より多いこと等を以てためす話がある」とされている。

『雑宝蔵経』は元魏の吉迦夜、曇曜共訳の漢訳經典であるから、難題型の親棄山の昔話が、柳田の言うように印度起源で、中国を経て日本に伝わったことは間違いないところであろう。それでは、そこで実際に展開されている天神の難題とは、どのような難題だったのであろう。大正原版大蔵経所収の『雑宝蔵経』にそれを探したら、次のような九つの難題であった。

- (1) 捉二持二蛇一。著二王二殿上一。而作二是言一。若別二雄雌一……。
- (2) 誰於二睡者一。名レ之為レ覚。誰於二覚者一。名レ之為レ睡。
- (3) 此大白象。有二幾斤兩一。
- (4) 以二一掬水一。多二於大海一。誰能知レ之。
- (5) (天神復化作二餓人一。連骸拄レ骨。而來問言。)世頗有三人飢窮瘦苦劇二於我一不。
- (6) (天神又復化作二一人一。手脚杻械。項復著レ鎖。身

中火出。拳体燦爛。而又問言。世頗有三人苦劇我
不。

(7) (天神又化作二女人。端政(正)瓊(瑰)璋。踰
躡於世人。而又問言。)世間頗有端政之人如(似)
我者。不。

(8) (天神又以二真檀木方直正等。又復問言。)何物。
是頭。

(9) (天神又以二白驕(草)馬形色無異而復問言。)
誰母誰子。

なお、『法苑珠林』の難問は、『雜寶藏經』の本文を引用してあるので、右と同じである。さて、このようにして漢訳經典の難問を取り出してみると、日本化した説話中使用されていたのは(1)(3)(8)(9)といった、理解し易いそれであったことが分かる。しかもそれがさらに日本化して、象が牛に替わったりしていたのである。ただ面白いことに、『雜寶藏經』には『枕草子』の第三問にあたる「七曲の玉の緒」つまり、蟻通の難問がない。従ってこれはそれ以外の資料によるものであろう。新潮日本古典集成『枕草子』下の頭注では、〈後世の文献ではあるが〉としながらも末の睦庵撰の『祖庭事苑』の一文を掲げ、〈その原拠となった世伝を未だ調査するに至らないが〉と断わっている。この孔子世伝のような資料が清少納言の時代、いや紀貫之の時代より早く日本に渡り、それが蟻通の難題を日本にもたらしたものと考えられる。このようにその原拠は今のところ判然

としないが、後世の『神道集』や奈良絵本に照らして、「七曲の玉の緒」の難題もまた柳田の言うように外来種の難題だったことは間違いない。いやそればかりではない。関敬吾の『日本の昔話』を見ると、そこには「灰繩千束」(は(略)「砂で繩をなう」(A.F. ITA)から變化したものである。このモチーフの起源はきわめて古くBC二〇〇〇年代のバビロニアのアヒカル伝説(Ahikar, Haik ar-Sage)にある)とあって、これも元は外国種の難題だったようである。

三

柳田の分類した二種の昔話についてこれまで検討した結果分かったことは、実際に語られてきた昔話をずいぶんと純化し、整理した上で提示していることであろう。それは『日本昔話大成』に分類整理された昔話と比較対照してみれば明瞭である。たとえば親棄奮の昔話でも後者のそれには難題型、鬭争型、枝折型が混在しているし、難題型のそれにも他の要素が分かちがたく含まれている。それを以上のように純化して述べてきた理由を、私たちは「六 接穂と台木」の章に発見する。そこで柳田はこれまで述べてきた外国種の昔話を、〈老人は考え深く又色々の好い経験を積み貯えて居て、何か困ったことがあると助けてくれる。それだから大切にしなければならぬと言うのでは、親孝行

も勘定かんじょうずくになって、我々の心持とは一致しない」と批判しながら、へしかし斯ういった外国の昔話が、千年も八百年も前に、もう我邦わがくにの人たちに覚えられて居たということはこちらにもそれと半分以上似かようなものが有った為だと見ることはできないだろうか」と問題を提起する。その上でその台木とも言ふべき在來種の昔話に、外來種のそれが接穂つぎほされて花開いたのがこの昔話だった、と推定してゐるのである。そのために彼は、これまで見てきたように昔話をできるだけ単純な型（基本型）に整理して提示してきただけであった。彼の分類が『日本昔話大成』の分類と異なるのも、このせいだったのである。

さて、第三種の話として挙げられているのが、『大和物語』などに出てくる信州更級の姨捨山の話と、それと前半は同じでありながら、後半は大いに趣を異にする奥羽地方などで行なわれている昔話である。

（略）男は心がやさしく、いつでも孝養ようやうしたいと思うのだけれども、その女房が甚だよくない女で、年寄をうるさがつて棄ててしまいなさいと始終勸める。あまり色々というので男もついに負けて、姥うばをだまして山へ連れていくことになる。（略）大和物語などに書いてあるのは、その晩はちようど好い月夜で、じつと山を眺めて居ると悲しくなつた。それで男は

我が心なぐさめかねつ更級さらしなやおばすて山に照る月

を見て

という一首の歌を詠よんで、又再び老女を迎えに行つたということになって居て、其あとどうしたかを詳しくは語つて居ない……

この話は嫁姑の争いが絡むので鬭争型と言われている昔話である。以上のところで話が終つてゐるのは、『大和物語』や『今昔物語集』巻第三十本朝付雑事、それに『俊頼口伝集』の当該歌の項などで、昔話には右の歌の代りに以下のような老婆致富譚が続いていく。

（略）老婆は常日傾心掛けのよい人だった故に、山の神様の恵みを受け、又は不思議の幸運によつて、思うことの何でも叶かなう打出小槌うちでの小づちという宝物を手に入れる。それで地を敲たたいて、先ず食べ物や着物を打出し、次に自分が若く又美しくなり、それから其山中を大きな町にして、立派な家をその中央に出現させて店を開いたとも言へば、酒屋になつたとも言つて居る。悪い女房はその噂うわさを聴いて、羨うらやましくてならなかつた。それで今度は男に頼んで、自分を山の中に棄てさせたが、あてにして居た宝物は手に入らず、ひどい難儀をして死んでしまつた……

柳田はへ昔話には（略）善人がしあわせをしたという話

には、必ず悪い人が悪い報いを受けたということが附いて居る」と言い、(棄てられた老女の不思議な幸福を語るために、そんな有そうも無い悪い女房を、引張って来る必要が有ったものかと思う)と述べている。『日本昔話辞典』

(昭52・弘文堂)で三原幸久が「老婆致富型」と呼んでいるこの昔話は、文献には出て来ない。謡曲「姨捨」の場合には老婆は山中で死んでしまう。そしてその霊が都の人の前に現われるのである。ただ、花部英雄がその論でつとに指摘しているように、『日本霊異記』中巻(日本古典全集)「悪逆の子、妻を愛し、母を殺さむとして謀り、現に悪死を被る縁第三」には、老いた母を棄てようとした子が逆に自分の死を招いてしまう話が載っているし、江戸時代の『統歌林良材集』上の「子のために枝折する事」にも、老いた父を捨てようとした子がもう少しで命を失いそうになった話が、記されている。この二話はその内容から見て鬭争型の話とは厳密には言えないが(なぜならば妻と男の親との間の葛藤が語られていないから)、子が罰せられるという点では共通するものがあつた。

さて右の話は、伝承されてきた昔話と文献をもとにもう少し細分化するとすれば、「鬭争型」の話と「老婆致富型」のそれとに分けることができよう。しかし、『日本昔話大成』でもこの昔話は前半と後半とを分けることなく「五二三D 親棄山」として四番目に分類整理されていた。昔話そのもの内容からは、その分類の仕方が最も適当と思わ

れる。

柳田が第四の昔話として分類するのは、次のような内容である。

第四の昔話というのは、前の三つのどれよりも、簡単に又古風であつた。(略)最初はただ何かよくよくの理由があつて、どうしても親を山の奥へ送つて行くことになり、親も承知の上で、子の背に負われ、山に入つて行つたという話だつたかと思われる。老人の知恵という話が多くは父親であるに反して、この方は、母親だつたというのが普通である。その母が子の背に負われて居て、路々左右の木の小枝を折つて行く。又は草を円めて棄てて行つたとも、或は罌粟の種子を少しずつ播いたともいう処がある。どうして其様なことをなさるかと思子尋ねると、お前が還つて行くのに路に迷わぬように、粟をして置いてやるのだと答えたので、親の慈愛に深く感動してしまつて、何が何であろうともこの親を山に残して置けないと、再びその場から連れて戻つて以前にもまさる孝行をしたという、至つて短い話だつたようである。

右の話を使宜的に枝折型の昔話と呼んでいる。だが、柳田自身も(あまり簡単のために此頃では、後先におまけの附いたものが多い)と言っているように、右の内容だけで

独立して語られる昔話はない。従つて『日本昔話大成』の分類項目には、これが立てられていない。「五二三A 親棄山」つまり難題型の昔話に分類された昔話に、それが混在しているのである。

柳田は「九 母の愛情」の項で鹿児島県甕島（こしきしま）に伝えられているそれを紹介している。が、その昔話にも難題型の話が接穂されている。ただ、先に引用した下河辺長流の『続歌林良材集』の「子のために枝折する事」は、枝折型のそれに相当する内容を持っている。けれども、へむかしするがの国に住けるもの父の年老いて死なぬことをうるさし」と思つて富士山に捨てようとする点において、柳田が感動的に語っている枝折型のそれとは別だと考えざるを得ない。つまり、伝承されてきた昔話にも文献にも、柳田の言う第四の話は、それだけが独立した形では現れてこないのである。それゆえこの分類は、彼の『一目小僧その他』同様、一つの仮説だと言わざるを得ない。しかし、だからといつてこの仮説がでたらめだということではない。むしろ外来種と在来種の混在する昔話から、注意深く外来種の影を取り除き削ぎ落し、その結果依然として残っているものを、古風な在来種とするのは、すぐれた仮説と思われる。しかもそこに、歌まで伝承されているのだから。柳田も「古い頃の昔話には、和歌を伴ともなうものがあつたと言ひ、へ殊に外国に似たような話のある場合などは、言葉がちがうから歌まで持つて来ることが出来ない」と、それを在来種

の昔話判別の根拠にしている。

それでは枝折型の昔話にはどのような歌がついていたのであろうか。柳田は「道すがら枝折々々と折り柴はしばはわが身見棄てて帰る子の為ため」という甕島（こしきしま）の老人の詠んだ歌を挙げた上で、さらに次のように述べている。

（略）古く伝わつて居るのはもつとよい歌であつた。そうして女の歌であり、又涙をこぼして感動した母親の歌でもあつた。

奥山にしおる栞は誰のため身をかき分けて生める子の為

（略）身をかき分けてという歌言葉は、母の口ずからで無いと出て来ない言葉であつた。私の想像するところでは、始めて和歌を添そえて此昔話をした人は、或一人の母であつた。若い頃は心のやさしい娘であつて、かつてしみじみとこの話を聴いて、一生の間覚えて居たのである。それを年とつてから娘たちに、又かわいい孫たちにして聴かせる時に、思はずさういふ歌が心に浮かんで、それを山に棄てられに行く老女の作のようにして高い声を出して歌つたので、じつと聴いて居た若い女たちも、親の有難さをじんと胸むねに響かせて、恐らくは皆涙ぐんだことだろうと思ふ。

こう書いた後柳田は、「親棄山」の文章を（私は母に別

れてからも五十十年にもなるが、それでもこの歌を聴くと
思い出して、いつも孝行の足りなかったことを悔み歎かず
には居られない」という二行の文で締め括る。ここまで読
んで来た時、私はこの文章が実は柳田の母恋い（母求め）
の記であったことを悟る。彼は「母の手毬歌」の中で自分
の母たけのことを、〈私の母は、今活きて居ると百六歳ほ
どになるのだが、もう五十年も前になくなってしまった。
男の子ばかりが八人もあって、それを育てるのに大へんな
苦勞をして、朝から夜までじっとしている時が無いくらい、
用の多いからだであつたのに、おまけに人の世話をするの
が好きで、よく頼まれては若い者に意見をしたり、家庭の
ごたごたの仲裁をして見たり、とかく理屈めいた話が多く、
どちらかというとならしい所の少ない人であつたが、それ
で居て不思議に手毬だけを無上^{むじやう}に愛して居た〉と書いてい
る。そのような母への思慕が「親棄山」の第四の話の中に
溢れ出し、それを簡単に古風な在来種と彼に仮定させる原
因になつたかと思われような終わり方で、この文章を締め
括っていたのである。岩本由輝が〈柳田は、母のやさし
さ、そして女性のやさしさに実は幼児から飢えていたので
ある〉と書き、岡谷公二が〈この父恋い、母恋いとさえ言
える感情は、『叙情詩』から『海上の道』に至る彼のすべ
ての著作の底に潜^{ひそ}まに潜在していたもう一つのパトスであつ
た〉と書いているように、彼のこの情念が覆^{おほ}い難く流れ込
んでいたのが「親棄山」の文章だったのである。そしてこ

の点がこの文章のもう一つの特色であつた。そういう意味
において柳田の「親棄山」は、井上靖の「姨捨」や深沢七
郎の「榎山節考」に通底していたのである。

〔注〕

(1) 『日本お伽集1』（『東洋文庫』昭48・11・10・平
凡社）の「解説」ではこの話を「日本伝説」とし、
次の三種に分類している。

第一 原谷の物語……

第二 蟻通明神の物語

第三 所謂姨捨山の伝説

そして、第一種と第二種は印度起源、第三種は日本
独自の話としている。

関敬吾『日本昔話大成』（角川書店）はこの昔話を
四つの型に分類している。しかしその分類の仕方は
柳田と違っている。以下参考までに『大成11』から
それを引用しておこう。

五二三A 親棄山（AT九八一）

1、殿様が六十（六十一・六十二・七十・七十一）
になると老人を山（畑）に捨てさせる。ある男が家
の床下に親を隠しておく。2、強国から三つの難題
を課せられる。殿様は解決した者に褒美をやるとふ
れる。難題。(a)馬（牛）の親子・青大将の雌雄の
判別。(b)材木の根と梢の鑑別。(c)曲玉の穴に糸を通

すこと。(a)灰繩千尋^{ひょう}。(b)打たぬ太鼓なる太鼓。(c)ひゅうひゅうどんどん袖がぶり、または一把の藁^{わら}を十六把にすること。(a)は子馬は親馬のあとにつく。(b)は水に浮かすと根が沈む。(c)は一方の穴に砂糖をぬり蠟^{ろう}に糸をつけて通す・繩を焼く。3、その男が親に聞いて、解決し、親の命を助けてもらう。(それから老人を捨てる習慣がなくなったという)。

五二二B 蟻通明神 (AT九八一)

1、中国から(1)曲玉(穴)に糸を通すこと。(2)木の根と梢とを見わけけることの課題を与えられる。2、解決したので、日本には知恵者がいると中国は戦争をやめる。

五二二C 親棄翁 (AT九八〇)

1、親と子が爺(婆)を山に捨てる。爺は途中で柴を折って捨て、親子の道標にする。2、父が爺のをせていった畚^{かひ}を捨てる。子供は父を捨てるよきのために持ち帰るといふ。3、父は爺を連れて帰る。

五二二D 親棄山

1、夫婦で老いた親を山に捨てて小屋をつくって入れ、火をつける。2、老人はのがれて呪物(小槌・玉)を得てよい暮らしをしている。3、(a)女房(夫)が発見してこれをまねて失敗する。(b)女房は夫を小屋に入れて火をつけると死ぬ。

(2) 近藤春雄著『中国学芸大辞典』(初版昭53・第六刷

昭58・大修館書店)に(我が国には古く伝来した孝子伝として陽明文庫蔵の、孝子伝二巻が存している。これは鎌倉ごろの写といわれ、上巻に(略)原谷(略)の二十三話、下巻に(略)二十二話、計四十五話を収めていて、平安時代以降鎌倉時代を通じて行なわれたものと考えられる」とある。

(3) 横山重・松本隆信『室町時代物語大成第二』(昭50・角川書店)所収の「蟻通明神のえんぎ(仮題)」。

(4) 括弧内の漢字は異本。以下同じ。

(5) 関敬吾『日本の昔話―比較研究序説―』(昭52・日本放送出版協会)の二五三〜二五四ページ。

(6) 花部英雄「姨捨山私考」(『昔話伝説研究』第六号・昭52・七月・昔話伝説研究会)

(7) 江戸時代の歌人・和学者下河辺長流の編。一条兼良の『歌林良材集』の「由緒ある歌」を取り上げて充実させたものだといふ。本文は『続々群書類従』第十五によった。

(8) 岩本由輝『柳田国男・民俗学への摸索』(第二刷、82・柏書店)の一〇ページ。

(9) 岡谷公二『柳田国男の青春』(第一刷、77・筑摩書房)の一九〜二〇ページ。